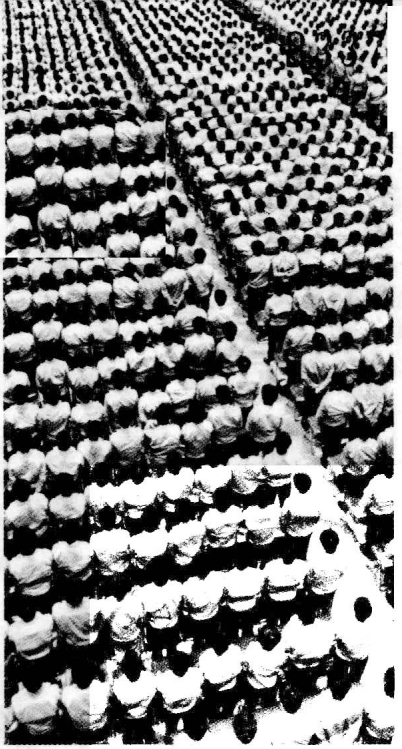
# 労働者文学その側面

佐多稲子と《驢馬》の周辺

塚本雄作



# 労働者文学その側面

## 佐多稲子と《驢馬》の周辺

塚本雄作

オリジン出版センター

本名　鎌倉常三

現住所　〒427 島田市阿知ケ谷540—1

**労働者文学その側面**

1987年5月13日　発行　　定　価　2700円

著　者　塚本　雄作

発行所　労働者文学会議

発売所　㈱オリジン出版センター

東京都新宿区岩戸町16　メジャー神楽坂402
電話（03）260—0453
振替　東京0—44705

装　幀　後藤　一之

印　刷　KMS

落丁本・乱丁本はお取り替えします

# はじめに

この本のささやかな一つの特徴は、労働生活のなかで書き継がれて来た、ということであろうかと思う。

それは、一九三〇年代から今日まで、五〇年に亘る工場労働のなかで、労働と文学とのかかわりを、また政治と文学、文学と世界史のかかわりを、自分として探求して来たことであった。もとより労働生活のなかで、自然科学・社会科学等学問の諸分野でさまざまに活動している人々は数多い。芸術分野でも、音楽・美術・文学を学んでいる人々は一層多かろうと思う。

しかし労働生活は、時間の上でもエネルギーの上でも、創造活動の大きな制約となっている事実がある。労働は、あらゆる創造のモメントであり、文明は、労働によってもたらされるという根源の事理は、いささかも崩れないのにである。

たしかに労働生活者は、日々の仕事に追われ、自分の仕事の責任を果すために、夜でも昼でも仕事のことを考え、仕事のために家庭を犠牲にしている人々もすくなくない。仕事人間・働き蜂などといわれる所以である。そういう人々は、人間としての本然の欲求——自然の摂理を会得し、社会発展の合法則性を認識し、世界史の必然を自覚して社会的能動へのモメントはさまざまあるが、その発現の機会はきわめて乏しい。それほどに富と時間とエネルギーに恵まれない労働者階級は、しかもなお歴史の上で果すべき使命は解除されていない。その回天の事業と未来への眺望はいまだに試行錯誤のな

かにある。

世界の労働人民は、それぞれの風土・習慣・伝統によって民族と国家とに分離している。地理的・文化的条件は格差となって、地球上に政治経済体制の相克をもたらして、諸国家間の対立は労働人民の統一を妨げている。こうした国の内外での確執と拮抗のなかで、労働人民はいかに何を為すべきか。

この本の、労働生活のなかで書き継がれて来たもう一つのモチーフであった。

この本を、より多くの働く仲間たちに読んでもらいたい、と希うにしては、私の知能の至らなさ未熟のことで忸怩たるものがある。それでも提示することにはもとより私の思案がある。それは、この本に書かれた事柄は、働く階級の人々との共通の視点に立っているはず、とするひそかな矜持によっている。そして働きながら、乏しい時間のなかで、疲れた心身を励まして、学び考え行動することの使命感はもとより階級的自覚の深浅によって定まるとしても、働く階級の協同事業としての連帯意識にあったのである。このことは、けっしていわゆる労働者万能、労働者独善を意味してはいない。労働者階級の意識の変革の問題を提起しているからである。

一つには「核」の問題がある。

まいねん八月になると原爆反対の祈念祭がある。そのとき私はいつも奇妙なカラクリに憤りをもつ。

〃安らかにねむってください。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あやまちはくり返しませんから〃

「あやまち」を誰が犯したか、あやまちを犯したものは罰せられているか、問われていない。祈念する善意の人々が心に誓うことはこの上もなく崇高なことであった。自分たちは「あやまち」を犯さなかったが、「あやまち」を犯したものがあったので、その「もの」たちを罰して誓いを立証してはじめて悲惨な死者たちへの慰霊となるのだろう。戦争世代の責任、などとの世代意識にすり替えられ兼ねない因果がある。「あやまち」は、戦争を惹きおこしたものたちにあり、戦争時代の支配者であろう。

このことはいわゆる「戦争責任」の所在にかかわっている。

この本のなかで「戦争責任」の問題をとりあげているのも、真に戦争責任のあるものたちを追求しないで「被害者」であったものの「責任」を問うことの奇妙な倒錯した発想は、現代の反戦反核のたたかいの道を誤る、と思うからである。

あやまちをくり返えさせてはならない。

日本国民は、かつての大平洋戦争で加害者であったのか。アジア諸地域および東大平洋諸島を侵略した日本軍隊の構成員の大多数が国民各層の出身者であった、ということで国民の戦争責任となり「加害者」であった、ということになるのか。赤紙一枚で——拒否すれば逃亡罪で罰せられる強権軍国主義は、国民を「加害者」に仕立てた陸海空三軍の大元帥は他ならぬ天皇ヒロヒトであり、これを擁立する独占資本と大地主の天皇制支配体制であった。

他国・他民族を侵略した軍隊は天皇の軍隊であった。

またこの本のなかで、政治と文学とのかかわりに「二律背反」にちがいない、と思われる問題を提起した。それは「反党変節の作家佐多稲子」とする文芸批評にあった。

「二律背反」とは「相互に矛盾する二つの命題が同等の権利をもって主張されること。また二つの命題が論理上はともに正しく、理性では解決できない」とするカントの哲学上の解明であったが、作家の真実は表現された「こころのたたずまい」をもって計る他はない、とした私自身の文芸批評の提示であった。

マクシム・ゴーリキーを処遇したイリイッチ・レーニンを、ここに持ち出すことはおこがましい。ただ政治上の命題と、文学上の命題とが、互いに相矛盾し相克するときには、文学の命題は文学の立場で政治を超克する他はない、としたことであった。だから政治は、政治の立場で文学を超克すればよい。そこには「二者択一」はあり得ない。政治の命題は最大公約数の上に成り立ち、文学の命題は最小公約数の次元の上に成り立つものであろうから。

中国革命の指導者・毛沢東は「革命は鉄砲から生れる」といったが権力は力を背景にして奪取できる、という政治の命題であるが、人間性のモラルを追求する文学の命題は「鉄砲」からは生れない。人間の存在は、自然の条件のなかに胚胎し、歴史と社会関係のなかにしか存立し得ないものであろうから、政治と文学——政治の優位性、という曽ってのプロレタリ文学運動に生れた一つの理念から現代の文学と政治の問題をすべて律し去るわけにはいかない。

そこに私の「佐多稲子論」のモチーフがあった。

この本は、私の歩いて来た五十年の労働生活のなかで書かれた。主として労働現場の実感のなかで捉えたテーマは、ある意味で主観性がつよいかも知れない。また視野の行動半径の狭いことも事実であろう。そして、労働現場からの実感、というモチーフをカリスマ的に振りかざすものでも勿論ない。

ただ現実に私は労働者であった。

労働して妻子と共に生計し、労働生活のなかで人間と文学、社会と世界史について考え、また労働運動のなかでさまざまの矛盾と葛藤のなかで体験したことが、あるいは現代の働く人々とより多い共感を得られることかも知れない。

働く大多数の人々との共感の上にのみ、私たち労働者文学の未来がある。国籍・民族のさまざまな格差のなかでも世界の労働人民の連帯はつよまる。ただ一つ、人間の真実に立っている限り……。

この本は、多くの友人・知己の励ましによって生れた。

なかでもオリジン出版センターの武内辰郎氏、労働者文学会議の原田筧氏、女性史・労働運動史家の鈴木裕子氏。そして文学上の教導を得た文芸評論家の小田切秀雄氏、作家の佐多稲子氏の厚情によって生れた。

五〇年、文学の道を共に歩いた東海文学の仲間たち、松井太朗・菅沼五十一・後藤一夫・赤堀清太郎・木々卓代・鎌倉静枝・鈴木清市氏らにありがとう、と申したい。

世界史の壮大な試行錯誤のなかに……。

一九八七・二・二三

塚本雄作

# 目次——労働者文学その側面

はじめに

Ⅰ　労働者文学その側面

労働者文学における創作方法の問題……13
労働と文学の道……46
労働者文学論……50
『静かなる山々』の諸問題……95

Ⅱ　佐多稲子抄論

ある作家の黎明……133
——『驢馬時代』の佐多稲子
転形期の文学……160
——『驢馬』その文学の系譜
詩と革命のパロディ……184
——挽歌　ぬやま・ひろし
草莽の盾……207
——戦時から戦後へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作家の夕映え……232
——『夏の栞』佐多稲子

## Ⅲ　戦後の民主主義文学

民主主義文化革命と労働者階級……277
——人民文化同盟について
「レッド・パージ」その意味するもの……290
田中英光……301
——人間の敗北と文学について
『極光のかげに』論ノート……315
——高杉一郎氏の知性とその相克の悲劇
課題は何か……343
——『新日本文学』と『人民文学』の問題

## Ⅳ　戦前・戦後の静岡文芸運動

詩の一面的批評……357

ギリシャ芸術について……362
短歌の史的展開……366
文学論抄……380
戦前・戦後の静岡文芸運動史考
1　戦前篇……401
2　戦後篇……426
解説にかえて……鈴木裕子
跋・塚本さんの文芸評論集に寄せて……佐多稲子

写真撮影　カバー・表　松本仁成
カバー・裏　思川太郎
（私鉄報道写真集団）

# I

# 労働者文学その側面

# 労働者文学における創作方法の問題

## 一　課題は何か

ある文学主張、文学運動は、それに伴う、またはそれを敷衍する創造方法、文学理論を主軸として展開していることは、近代の文学史が示している。浪漫主義、自然主義、写実主義、シュールレアリズム、象徴主義、社会主義、プロレタリア文学、民主主義文学等々等。

わが労働者文学は、あきらかに一つの文学主張であり、文学運動であることは自明である。労働者が書くから労働者文学、労働者を書くから労働者文学、労働生活を書くから労働者文学、といったような次元の事柄でないことも自明である。自然発生的な段階ならば明確な文学・運動理論の結実は未成熟としても、すでに目的意識をもって、創造と普及を綱領として組織体を組みあげている現在、さきの文学理論、運動・組織論の提起は、いま肝要な課題と、私は考える。

今さらでもあるまいが、私としてその原点に立って、過去、現在、未来について考えようとするには、自ら確認したいことがある。私が「労働者文学会議」に参加し、その活動に期待し、己れもその発展に自分として可能な限りの能動を思うことには、もとより私自身の欲求においてであったが、同

時に「会議」の掲げる「綱領」に、私自身の欲求を充足させるものがあったからである。その「労働者文学綱領」は、次のようである。

一、われわれは新しい文学の創造をめざし、労働者の連帯的表現を獲得する。

二、われわれは労働者階級のたたかいに参加し、共通する諸問題について関心を持つ。

三、われわれは労働とたたかいをとおして、文学創造の諸条件を獲得し、自らの文学を質的に高める。

四、われわれは連帯できるサークル・文学者・芸術家及び活動家と協働して、戦線を拡大する。

労働生活五十数年、生涯を労働者階級の文学の発展を求めつづけての試行錯誤の道であったが、私はわがふるさと、わが同胞にめぐりあった思いで一九八二年春参加した。遅きに失する感もないではないが、労働者作家たちが自主的に、全国的規模で結集し、意欲的に活動を展開していることは、労働者文学史上画期的であったのである。もう二十年にもなろうか、その頃私は、ただひたすら働いていて、語り合う友も遠く、模索のなかで児戯に等しい思いに駆られたことがある。「労働者文学」のノボリをひとりで担いで街中を歩き、一人でも二人でも同志にめぐり合えないものかと。そんな私にとって、「労働者文学」は、五十年の命題なのである。けっして失うことのできない、それなくしては私の生涯も無い、只一つのものなのである。

そうして今、私は『労働者文学』の中に立った。『労働者文学』の、気の許せる、同じ釜の飯を食った、肌の合う、多くの仲間たちの中に居る。なんで仇やおろそかにできるものか。そして愚者の一念でもあろうか、何十年間にわたって、ただ一つのこと、労働について、労働と人間について、労働

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com